

Q グローバリズムの「誤解」と地方による「外交」

グローバル化の時代だからこそ、国や地域が大事になる。

外交の「申し子」藤崎さんは、こう断言する。

ボーダーレスなどあり得ない、日本を知るより相手を知れ、コンテンツよりも方法だ…。

刺激的だがシニカルではない、知情意がハイレベルで交差した、真っ向勝負の提起を聞こう。

最近、気になっていることがあります。それはグローバル化についての国内での議論です。少し違うかなと思うことがありますので、まずこれについて、私の考えを話します。その次に、さらなるグローバル化のために、特に地域として何を考えていたか、どうかをお話してみたいと思います。

二つの誤解

最近、若い人たちとお会いして「あれっ」と思うことが、三点ばかりあります。まずは今の国際社会のとらえ方です。次に日本文化の発信ということについて、そして最後は語学についてです。一番目の趣旨は、世界がフラットになり、一つになって、国境は低くなっているというものです。二番目は、日本人は発信が下手で、国際社会で活躍するためには、もっと日本を発信していかなければいけないという議論。三番目は語学は単なるツールであるから、若い人たちにとっては語学よりも中味が大事だということ。あるいは逆に国際社会に出て行くためには英語だけではなく、第二・第三の外国語をしっかり身につけなければいけないという声もよく聞きます。私はこれらの議論はどこかに誤解があると思います。

「国境はなくなった」という誤解

まず国際社会の現状について話しましょう。これは国境つまり国というものをどう認識するかということと、大きく関わっています。世界はフラットになり、国境は低くなつたという認識の高まりが背景にあります。もちろん真実も含まれています。でも同時に誇張も潜んでいるのではないのでしょうか。

トム・フリードマンが『フラット化する世界』の中で、インターネットの普及によって、情報は一瞬にして世界を駆け巡り、多国籍企業が経済活動の多くを支配し、これまでの知識に価値が置かれた時代から、想像力が重視される時代になった、という意味のことを書きました。彼はニューヨーク・タイムズの名コラムニストで、ピューリッツァー賞を二度も受賞しています。私たち夫婦もワシントンで友達になりました。こういう議論から「国境がなくなった」という意識が広がったのかもしれない。

フラットになっても国境は消えない。

しかし、本当に国境はなくなっているでしょうか。確かにEUのように国を越えた機関もありますが、まだまだ例外です。国際社会のほとんどは、国を中心にまわっています。現実の世界で起きていることを見てみましょう。政治的には、ウクラ



藤崎一郎（ふじさき・いちろう）

1947（昭和22）年、鹿児島県生まれ。1969年慶應義塾大学を中退、同年外務省入省。北米局長、外務審議官、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部特命全権大使等を歴任、2008年～2012年までアメリカ合衆国駐劄特命全権大使。退官後は、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問、一般社団法人日米協会会長などの要職を務める。

Ichiro Fujisaki President of the America-Japan Society, Inc. Distinguished Professor of Sophia University, An international strategic advisor

藤崎一郎